

2 図画工作科授業を支える取組（環境づくり）

① 図工室の環境整備

図工室が、児童の「つくりたい」を支える部屋となり、教職員の幅広い教材研究に応えられるような部屋になるようにと、教職員で相談しながら図工室の整備を行った。描画用具・工作用具等、活動別に近くにまとめて配置し、金づちやのこぎり等の安全面で配慮が必要な用具は鍵のかかる棚に収納した。また、材料については収納戸棚の扉に写真付きのラベルを貼ることで何がどこにあるか一目で分かるようにした。さらに、移動式のカートをついたことは、図工室の整理整頓や授業の効率化に役立っている。



【活動別に使いやすさを考慮した用具の配置】



【写真付きラベルで見やすくした戸棚】



【授業の効率化につながる移動式カート】



【安全面に配慮した鍵付き棚】

② 身近な材料の保管

図工室以外にも低学年の生活科の学習と共同して、空き箱、牛乳パック、トレイやパック等の空き容器やトイレットペーパーやラップの芯等の他、どんぐりや松ぼっくり、木の枝等の自然素材、日常生活や地域にある身近な材料を意識的に収集・保管している。児童が自ら選んで使えるように棚や箱に整理されており、図画工作科の活動においては、児童の自由な発想を支えるものとなっている。これにより、材料選びも活動の一部となり、児童の主体的な造形活動や探究的な学びを促進している。低学年の児童の中には、この部屋を「宝の部屋」と呼ぶ児童もいる。



③ 交流が生まれる展示の工夫

児童玄関から通じる真っ直ぐな廊下の床や窓、壁面に低学年児童がビニルテープを使って自由な造形を展開し、学校生活の中に造形的な風景を生み出した。全児童が通る場所を「展示空間」として活用することで、児童同士の交流を促すものとなった。

また、1年生児童が自分達でつくった色水を並べたり積んだりして色の美しさを感じられる展示を工夫した展覧会を上学年にも公開した。作品に対するコメントをもらうことで、異学年間の対話や鑑賞活動が自然に生まれ、児童は、自分の作品が見られる喜びや、他者の視点に触れることで表現への自信と意欲を高めることにつながった。



④ 地域を生かした教材の共有

本校に隣接する城山や中央公園は、放課後や休日に友達や家族と訪れる児童にとって馴染み深く、遊具で遊んだり、四季折々の自然を感じたりできる場所である。学習活動の中で、季節の花のスケッチをしたり、どんぐりや落ち葉などの自然素材を使った工作や造形遊びを実施したり、児童は自然の色や形に触れながら、自分の表現を広げている。また、中央公園内にある徳島城博物館の展示鑑賞や芸術祭への作品出品ができる機会もある。今年度は、高学年の授業で、夏の特別展「阿波踊りの世界」の展示品を取り上げ、鑑賞活動を行うことを計画している。地域とつながる学びの場としてとても貴重であり、児童の表現力や鑑賞力を育むだけでなく、地域への愛着や誇りを育てる機会として、今後も大切にしていきたい。

3 教職員研修

校内研修「主題説明・指導案の書き方」

「『ひもでつないで』（造形遊び）の指導について」

実施日：令和6年5月15日

講師：鳴門教育大学附属小学校 川真田 心 先生

児童になったつもりで「ひもでつないで」の造形遊びを体験したことで、空間や素材への理解が深まり、多くの気づきが得られた。毛糸を校舎内のさまざまな場所に結んだり、つないだり、垂らしたり、張ったりする中で、普段は意識しない空間の広がりやつなかりに目が向くようになった。児童がどのように空間を捉え、自由に発想しているかを想像することもできた。遊びの中で生まれる偶然や試行錯誤の面白さを体験し、指導においては児童の感覚や発想を尊重することの大切さを改めて認識することができた。



校内研修「『形に命を吹き込んで』（工作）の指導について」

実施日：令和6年8月8日

講師：鳴門教育大学附属小学校 川真田 心 先生

低・中・高学年部会に分かれ、グループで協力しながら題材づくりに取り組んだ。参加者自身が実際に製作を体験することで、授業づくりのヒントを得ることができた。

講師の川真田先生からは、以下のような指導上の留意点を示していただいた。

- *題材が主題に沿っているかを常に確認すること
- *毎時間の細かな計画を立てることが重要であること
- *授業ごとに内容を修正しながら展開することで、ねらいに近づけることができること

また、ワークシートを活用した題材計画の立て方についても指導していただき、この方法は後の研究授業の計画において有効であった。



授業中のさまざまな場面における「声かけの方法」についても教えていただいた。

- *活動を促すとき（やってみよう／おもしろそうだね／こんな道具もあるよ等）
- *児童の想いを引き出すとき（なるほど、これはひょっとして…／どこがお気に入り？等）
- *技術的なサポートをするとき（こんな表現もあるよ、使えたら使って等）
- *児童を賞賛するとき（天才だね、これは／このカタチは思いつかなかったな等）
- *活動そのものを認めたり褒めたりするとき（いいよ、じっくり考えることも大事だね等）
- *自分の感じたイメージを伝えるとき（やさしい感じがするね／リズムがあるね等）

また、児童が活動に熱中しているときには、あえて声をかけない方がよい場合もあることを教えていただいた。

さらに、「児童のどのような姿を見取るとよいか」についても教えていただいた。

- *活動に熱中して思わず椅子から立ち上がったたり、作品と目が近かったりする様子
- *友達の作品を観察したり、アドバイスを活かしたりする様子
- *腕を組んで考え込んでいる様子
- *思わずひらめいて呟いた瞬間
- *友達と協働している様子
- *色々な角度から作品を眺める様子
- *自分の想いにこだわっている様子
- *友達に褒められて嬉しい顔
- *教師が予想しなかった望ましい姿
- *失敗して残念がる様子
- *色や形を比べている様子
- *体全体を使って表現している様子
- *満足そうな笑顔
- *試行錯誤している様子
- *自分なりの表現や工夫が見られる様子
- *自分の表現に誇りをもっている表情
- *ねらいに沿って活動している姿
- *チャレンジしている様子

校内研修「主題説明／『ぬのををつないで』（造形遊び）の指導方法」

実施日：令和7年5月15日

講師：吉野川市知恵島小学校 大塚 芽依 先生

色とりどりの不織布を使った造形遊びを通じて、子どもの視点に立った表現の楽しさや、素材との関わり方について学ぶ機会を得た。不織布という素材は、軽くて扱いやすく、結ぶ・垂らす・巻きつけるなど、さまざまな方法で空間に変化をもたらすことができる。研修では、職員同士で協力しながら不織布を結んだり、垂らしたり、広げたりしながら、児童になりきって活動を行った。素材の動きや質感を感じながら、素材を通して他者とつながる感覚や、共同で空間をつくる楽しさも実感した。このような体験を通じて、児童が素材と出会い、身体を使って表現することの意味や、教師がその活動過程をどう支援するかについて考える機会となった。造形活動における「つくり、つくりかえ、つくる」という繰り返しのうちに、児童が素材と対話し、空間を捉え、仲間と協働することで育まれる豊かな学びがあることを実感した。



校内研修「図画工作教育研究大会 第Ⅰ回事前研究会」

実施日：令和7年8月7日

講師：徳島県教育委員会 森 裕二郎 先生

鳴門教育大学附属小学校 川真田 心 先生

徳島文理大学 結城 栄子 先生

本校職員と講師の先生方、徳島県図画工作部会事務局の先生方、提案発表校の先生方をお迎えし、本校低・中・高学年部会における指導案の検討を行った。本年度の研究主題「豊かにかかわり つながり『わたし』がつながる造形活動」のもと、児童一人ひとりの思いや表現が、他者とかかわりの中で深まり、広がっていく造形活動の在り方について、協議を重ねた。

各学年部会では、造形活動を通して児童がどのように他者と関わり、自己を表現していくかを中心に、具体的な活動内容や指導の工夫について活発な意見交換が行われ、今後の授業づくりに向けて多くの示唆を得ることができた。

提案発表校の先生によるプレゼンテーションでは、児童の造形活動における「かかわり」や「つながり」が、どのように授業の中で丁寧に育まれているかが具体的に示されており、大変学びの多い時間となった。活動のねらいや導入の工夫、児童の思考を引き出す言葉かけなど、実践に根ざした視点からの提案は、今後の授業づくりに向けて、大変参考になった。

